



手工芸品生産工房における女性と仕事の民族誌ーバングラデシュの首都ダカにおけるカジの実践と場に着目して

鈴木, 亜望

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2021-03-25

(Date of Publication)

2023-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7956号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007956>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



学位論文の要約

手工芸品生産工房における女性と仕事の民族誌
——バングラデシュの首都ダカにおけるカジの実践と場に着目
して

2021 年 1 月
神戸大学大学院国際文化学研究科
鈴木 亜望

学位論文の要約

氏 名 鈴木亜望
専 攻 文化相関
指導教員氏名 齋藤剛 教授

論文題目

手工芸品生産工房における女性と仕事の民族誌——バングラデシュの首都ダカにおけるカジの実践と場に着目して

論文要約

本論文では、バングラデシュの首都ダカにあるシルクスカーフ生産工房を対象に、工房でのオーナー、コルムチャリ（従業員）、カジルメエ（家事に従事する少女）の視座から、それぞれがいかなる仕事を行い、工房の空間をいかに解釈し、工房内外の関係をいかに構築しているかを明らかにしている。それにより、開発研究やフェミニストによる、ジェンダー規範が生み出す男性への経済的社会的依存を問題視し、賃金労働によって農村貧困女性を救済するといった一面的な関係で捉えられていた女性の仕事の場や実践を再考してきた。

女性の仕事に関する先行研究の問題点は、開発研究やフェミニストがパルダ（女性隔離の慣習）を特に農村の既婚ムスリム女性たちの行動原理とし、歴史的な変化や女性たち自身の見方に対する検討が不十分だったことである。近年の急激な都市化と輸出向け縫製工場への若い未婚の女性たちの労働参入により、女性の仕事をめぐる状況は変化している。そのため、女性の仕事に関わる家父長制とパルダと呼ばれる女性隔離の習慣などの伝統的なジェンダー規範と、近代化を目指す開発支援の言説に付随するジェンダー平等のイデオロギーとを対立的なものとして捉えては、現実を十分に理解することができない。その問題を検討するために、本論文では既婚女性たちが伝統的に仕事をしてきた家と新たな労働の場である縫製工場との中間的な要素をもつ場所として、ダカのシルクスカーフ工房を対象に、工房で働く女性たちの視座を提示している。

バングラデシュで農村においてバリを中心に活動してきた女性たちが、都市へと移住し、縫製工場のような場所で労働するようになったことで、現実的な問題として新たな従属的關係が生じてきたのである。女性の都市への移動と就労により、従来のジェンダー規範のみならず、バングラデシュを覆うようになった開発経済システムの中で、縫製工場などで新規に労働に参入した女性たちが経済的下位層に位置付けられるようになったことである。つまり、女性は二つの従属的な関係の間に位置付けられることになったのである。伝統的なジェンダー規範と近代的な工業化との関係においては、現金収入を獲得するためにはパルダという従属的なジェンダー関係を回避しなければならない。他方、縫製工場への労働者としての参入することは、グローバル経済における低賃金労働者となることを意味し、かつバングラデシュの中でのエリートに搾取される存在として、労働に従事する女性が位置づけられる。すなわち、彼女たちは、グローバル経済と国内経済における従属關係に埋め込まれているといえよう。

これらの二重の従属的な関係を回避する場として手工芸品生産工房が「アジュール」であるという仮定のもとに、彼女たちの視点から仕事の場や実践を検討する解釈的なアプローチをとりつつ、工房をめぐる民族誌的事例を提示しつつ、その分析している。

第1章では、バングラデシュにおける手工芸品生産の展開を述べる。バングラデシュにおける手工芸品生産の位置づけを、ベンガルにおける工業化の発展が途絶されたこと、女性の賃金労働の場の変化、女性たちとの関係といった諸点から見定める。

第2章では、バングラデシュを取り巻いてきた開発援助の実態が、現地社会でいかに機能しているのかを明らかにするために、工房をめぐる支援の実態を描く。特に工房が取引を行う海

外支援者がフェアトレード団体であるという点に着目し、フェアトレードという名の開発援助と工房との関係を明らかにする。フェアトレード商品の受注は、フェアトレード規格に沿った商品生産を意味し、とりもなおさずフェアトレードという名の経済的な枠組みに取り込まれることとなる。実際、フェアトレードの流通システムの末端に工房は位置づけられており、支援の対象とみなされている。しかし、生産者として位置づけられているにも関わらず、工房において活動する女性たちの実態やフェアトレードに対する理解のあり方は、これまでのフェアトレード研究などにおいては等閑に付されてきた。

第3章では、工房の人々が開発援助によって生じた手工芸品生産をどのようにとらえているのかを、サハッジョという支援をめぐるローカルな概念を手がかりとして、当事者の視点から明らかにしていく。フェアトレードに関わることは、フェアトレードにおいて是とされる価値観や評価基準を受容することをも意味しうる。しかし、サハッジョに着目することは、当事者たる女性たちがフェアトレードの理論を自分たちなりに改変し、流用している様子を浮かび上がらせてくれる。工房に関わる女性の視点からフェアトレードなる新たな開発援助の問題点を明らかにすることも本章の目的との一つとなる。

第4章では、開発研究で見過ごされてきた現地の人々の視座に焦点を当て、オーナー女性が工房での仕事をいかにとらえ、なぜ仕事をし、なぜ「外国人」のサハッジョを好むのかを家との関係から検討する。彼女の人生において、工房での仕事に対して、家族を養い、コルムチャリを養うために有効な手段としてあったことを示す一方で、彼女のオーナーとしての活躍や、仕事をなんとしてでも続けようとすることに對し、夫が不満を抱いていた。両者の間の葛藤は、夫や妻の相互のケアに関するすれ違い、夫は妻が外出することと性的な奔放さにとらえることなどから生じていた。これらの事例から、それぞれの仕事をするもののとらえかたの違いを検討する。

第5章では、オーナーの下で働くコルムチャリ（従業員）たちを対象に、彼女たちによる仕事の選択、意味づけ、交渉の語りから、行動の地理的な範囲と賃金労働を行うことをめぐる分析を行い、彼女たちにとっての仕事の空間とはいかなるものかを議論する。男性の活動領域とされた現金獲得を女性たちが行うことに對して、家族や親族から同意や反発などの様々な反応がある中で、彼女たちは工房での仕事を世帯の経済の延長にとらえることで葛藤を調整する場であることを議論する。

第6章では、工房と接続するオーナー家族の家において、家事使用人として働くカジルメエの家と工房との関係と仕事に関して検討する。カジルメエたちは、家族のような関係として家において住み込みで働いている。しかし、カジルメエにとって家というメタファー（家と女性の結びつき、行動範囲の制御、家の安全性）が、オーナー女性やコルムチャリとは異なり社会からの排除として作用しているという問題を検討する。

第7章では、現地の手工芸品生産団体であるアーロンとの定期的な商取引のはじまりにより、生産関係が工房の内部および外部で変化した事例を示す。工房で恒常的にローカルNGOとの取引が始まり、勤務時間が長時間化し、オーナー女性からコルムチャリに對して仕事の圧力を加える中で、オーナーとコルムチャリたちの関係がいかに変化していったのかを検討する。